

海外で活躍する修猷生

ブラジル 小岩井達郎

S12年卒

光陰矢の如し、修猷館を卒業して早や六六年にもなる。我々の波瀾に満ちた過去(満州・支那事変・大東亜戦争・原爆被災等)をふりかえるとき、そこには多感な青春期の体験をたたきこまれた修猷館時代が磐石の如き重みで存在して居たことを忘れることが出来ない。

校庭裏の百道の海岸、そこには蒙古軍の侵攻を防いだ石垣の残りがあり、広大な校庭の二本木のまわりで肉體鍛錬に打込んだ自由素朴、いかなる困難にも立ち向かう強烈な同窓意識、更に個性抜群な教師達による精神教育とあいまって人生を通じて変わるこののない生活信条、質朴剛健の校風の延長線上に私の海外生活四三年があったことは、まことに恵まれた人生だったと今思う。

四三年の在任となったブラジルに於いて述べると、母国日本で時々出会う暖味さがなく、夢の多い大きな未来をもった大國と思う。

ただ、言語(ポルトガル語)カルチャーショックのストレスにかかった仕事を退職した今、長い日本の歴史の中で自然の英知を尊びながら、しなやかに生きてきた日本人自身による固有文化の一つである日本語にやっと同様、美しくも懐かしい母国語にトッピングとつかっている標準語同様、方言にもその豊饒な表現に一層すぐれた美しさがあのように思えて来た。また学生時代、天神町近くの横町にあった、オトツチャン・ウドンを思い出す。安くて量が多く、うまい素ウドンの味は今も忘れられない。

「ココノウドン・ハ・ナシ・コゲン・ウマカトナ?」「ソリヤナア、客ノ残シオッタ・ウドン

ガ・シルバ・ステント・カメシ・モータ、ソレバ・ニナオシ・マタ・ツコートルケンバイ)など心地よく心をくすぐる博多弁ではなかつたらうか。

私達大正初期のものの憂国は共通のものが、外国に居住すると更に憂国の情は増幅するようになると思う。それでも、大正初期生まれの我々は、大きなことをやりとげた。よくも日本復興をあの敗戦後やりとげた。という自負と満足感を味わっている人が多いはずだ。同窓諸兄よ、この思いを忘れずに続けよう。

中国 横田博

S51年卒

昨年の春先から中国で発生したSARSにより中国にとつては一番苦手である衛生観念、情報公開、社会保障と言った問題が表面化し、中国はそれを克服すべく日本では不可能な努力を払ってSARSの収束を迎えた。

その教訓が今後とだけ活かされるかは今から解ると思うが、喉もと過ぎれば忘れてしまひ、あまり生かされないのではないかとこの意見も多々あります。

一方、SARSの最中の北京での駐在員の行動、日本側の対応を見てみると日本の「予測できぬことへの不安」に対する「横並び行動」、「行動の論理性の欠如」、「不安への弱さ」という欠点が露見したと思うが、やはりこれを教訓として将来に備えようと言う意識が欠如しているように感じます。

SARS発生後日本人はSARSに対してどうすれば良いか判断が出来ぬ為、行動の指針を誰かが出す事を望み四月下旬には留学生に対する退避勧告がなされ、その後厚生労働省の十日間ルールがなされた。

これは在中国日本人及び日系企業に対して指針を出すという

大きな意味はあった。しかし、これがバイブルとなり強制ではない勧告に著しく束縛されてしまひ、その後の行動ではこの枠から脱する事が出来なくなった。これが六月頃になると個人及び団体の都合からこの一度出した指針を解除することを強く望んでいたことも事実です。

SARSの期間日本に帰国した人々にもさまざまな災難が発生した。SARSでもないのにそれを誰も判断しようとする。病院をたらいまわしにされた帰国者、知人より近寄る事を嫌がられホテルに隔離状態となった帰国者、肉親の葬儀、法事に出席させてもらえなかつた帰国者、別の病気で病院に行つたら拒否された帰国者、幼稚園/学校への通学を拒否され、通学を許可されても苛められた子女、これは論理的な根拠のない日本人特有の行動ではないだろうか?

これは少数者の排除、団体による行動を好む日本人にも弊があると思う。

但し、これらの行動がSARSを日本に絶対に持ち込まないという意志の現われでもあったと思う。

以上は小生が北京に駐在していたので感じることであり、日本にいたら多分上記日本人の行動に対して疑問をはさむ事も無かつたと思う。

大勢と異なる側面について初めて感じる事が出来たことではなかつたか?

今回のSARSを通じて中国は中国の問題点を、日本は日本の問題点を再度認識し、将来への備えをして行きたいものと思ひます。

移住して十年目になります。日本人である私には奇妙と思えるアメリカの文化慣習を思いつくままに書いてみました。

バイク・米国の自動車安全基準は世界一厳しいといつても過言ではないのに、なぜかオートバイのノーヘル二人乗りでの高速度走行が「アリ」だ。(中年

カッパルがバンタナを頭にまいてハリーデイウィットソンに颯爽と乗っている光景をよくみる。)なんて、また十六歳から車を運転できるこちらではオートバイを車運搬できるようなものになるまでの足として使う高校生はほとんどいないといつてもよい。バイクは「大人の乗り物」なのだ。

赤信号・基本的には右折は安全を確認できれば赤信号でも行つてもよい。踏み切りで一旦停止しなくてもよい。ちよつと危ないけど安全確認できればいいか?

GUIN...新聞に入つたガン・デイスカウントショップの広告。拳銃、ライフル、弾薬、保管庫、GUN用品ならなんでもあり。(ウォルマートなどで銃銃が売つてたりする。)ひえ、これはやっぱ驚き。日本では考えられないなあ。これも「アリ」か。

Tooth Fairy...子供の歯が抜けたらその歯を枕の下に置いておくとTOOTH FAIRY(歯の妖精)が夜寝ている間にあらわれ歯をお金に変えていくという。(実はサンタクロースと同様に親がやっているのだが。)うちの子ども歯が抜けるとお金になるので喜んでくれる。

ギブス...子供が骨折してギブスをつけると友人がギブスにサインしてくれらるらしい。へえ。スポーツバー...こちらの飲み屋では大画面TVをいくつも据えてスポーツ番組をみせるスタイルが一般的。リップを食べらなから飲むビールは最高。

Mobile Home...高速道路でよく「家」を運んでいるのを見かける。エコノミーな家は建てるものではなく買ってくるものなのだ。基礎がないので、竜巻が来ると「オズの魔法使い」状態になり危険。

りました。過去、彼女の身内はイスラエル軍によって殺されたと報道に出ていました。少し前までは、自分の日本にいる身内も、爆弾が爆発する度に安否を気遣う電話をくれていたが、最近では電話もほとんどかかつかなくなりました。ああまたか、という感じなのでしよう。

この土地には、数千年の年月をかけて、ようやく父祖伝来の地へ戻つて来たイスラエルの人々と、長らく外国の支配下に置かれ、占領からの独立を民族の悲願とするパレスチナの人々との間で、筆舌に尽くしがたい熾烈な闘いが繰り広げられてきました。当地の砂の一粒一粒から、両民族の叫び声が聞こえて来るようです。

ガザ市のパレスチナ難民キャンプに日本がこれまでに行つたプロジェクトを視察したことがあります。日本の米が、トルコからの食用油と、EUの小麦粉とパッケージにされ、長蛇の列の人々に渡されていきます。

「難民が食料援助物資を受け取つた時、飢えに対するサポートと同時に、もう一つのサポートを受け取っています。それは、世界は我々難民を見捨てていないというメッセージなのです。援助を受け取るたびに、日本人々がパレスチナのことを忘れていないとの思いを新たにしています。苦しい環境の中でも、明日に希望を見出すことができるのです。」との担当者の説明では目から鱗が落ちました。

日本の援助で増築したガザ難民キャンプ内の聳睡学校の入り口に張つてあつたポスターには、「私たちは日本の善意を決して忘れない」と書いてあります。胸にジーンとくるものがあると同時に、この様なパレスチナの人々からの感謝の声が日本にいる皆さんにも届いてくれたらいいな、と思ひます。

「サラーム」というのはアラビア語で、「平和」という名詞です。因みに、「ヘブライ語で、平和は「シャローム」と言います。アラビア語とヘブライ語は、同じセム語ですから、似ている単語がかなりあります。

イスラーム教徒もユダヤ教徒も挨拶は「サラーム(平和)」で

す。直訳すれば、「汝の上に平和があらんことを」とでもいいましようか。「平和」の重みを一番感じる地域で、日常の挨拶が「平和」というのは、皮肉めいて聞こえますね。May peace prevail on earth!

(在テルアビブ・日本大使館勤務)

フランス 増井和子

S27年卒

ここ三年ほど鯨の本を作っている。パリと日本を行ったり来たり、ようやくトンネルの向こうが見えてきた。フランスの編集者たちと仕事を進めて、二〇〇四年九月に英仏語版同時出版の予定だ。

最近「ワタシ、スシ、大好き!」というフランス人が増えたが、いざ鯨の話となると、なかなか通じない。「ママ、雪を見たことのないアフリカ人に、雪を説明するといいなさい。難しいことをいってもタメ」と共著者の娘に叱られる。

小さいときから私は鯨が好きだった。母はだいたい鯨が好きで、そのころ箱崎に住んでいたが、玉屋や岩田屋にシヨッピングに出かけると、お昼は鯨がきまりだった。中洲のどこのどこのか、行きつけの鯨屋は路地の突き当たりあたりにあった。小路に入ると、「あつ、和子、休みだわ!」母の声はほとんど悲鳴に近かつた。私もがっかりした。暖簾が出ていなかつたのだ。これがその後六〇年以上に及ぶ、いわば鯨と私のラブ・アフェアの始まりで、鯨という存在が母の悲鳴とともに胸に刻まれた。七歳だったと思う。やがて空襲がありその鯨屋は焼けた。母も亡くなった。だがこんな思いをフランス人に伝えようとすると、ノレンが何である

かを解説しなければならず、ましてカウンターで鯨をつまむ醍醐味など、わかつてもらえないはずはない。

その日は東京で、日本人シェフが作ったフランス料理を食べていた。なぜか突然、鯨が食べたくなった。すし飯の、あの甘酸っぱい匂いが押し寄せた。それで、同席の友人男女十人に聞いた。「月の世界に行くとしたら、何を持っていきますか?」立派で真面目な答が「テンプルに並んだ。パッパ、夏目漱石:私は鯨だつた。いずれ月に行く日には鯨を持っていくぞと決めた。もしかししたら、その日のフランス料理が退屈だったのかも知れない。東京にはホンモノの鯨がある。パリにも鯨はある。それは「パリの鯨」「ニューヨークの鯨」「モスクワの鯨」「アムステルダム」の鯨」「ロンドン」「ハワイ」。旅の先々で食べた鯨にその町の食欲の質がみえる。

鯨はいよいよ二一世紀のクワイックフードだ。牛肉のハンバーガーがあり、乳製品チーズのピッツアがつつき、きょう海の幸の鯨があつた。鯨の話を聞くと、世界の人の選択だ。鯨の美徳ならいくらでも揚げよう。手ごろな一口サイズ、カラフルでグラフィックはじめにメニューをきまなくていい、いくつ食べても、いつやめてもいい。浮気な食欲の赴くままに海を散歩する、自由に鯨を旅すればいいのだ。旅といえは、かつて江戸前の魚以外「旅もの」と区別された。いまマクドローはシリール島、タコはアフリカ、ハマグリは韓国から。築地市場は世界の旅ものたちで賑わっている。

鯨は美しい、鯨は旨い、鯨は日本の文化、そして何より自由である。

かを解説しなければならず、ましてカウンターで鯨をつまむ醍醐味など、わかつてもらえないはずはない。

その日は東京で、日本人シェフが作ったフランス料理を食べていた。なぜか突然、鯨が食べたくなった。すし飯の、あの甘酸っぱい匂いが押し寄せた。それで、同席の友人男女十人に聞いた。「月の世界に行くとしたら、何を持っていきますか?」立派で真面目な答が「テンプルに並んだ。パッパ、夏目漱石:私は鯨だつた。いずれ月に行く日には鯨を持っていくぞと決めた。もしかししたら、その日のフランス料理が退屈だったのかも知れない。東京にはホンモノの鯨がある。パリにも鯨はある。それは「パリの鯨」「ニューヨークの鯨」「モスクワの鯨」「アムステルダム」の鯨」「ロンドン」「ハワイ」。旅の先々で食べた鯨にその町の食欲の質がみえる。

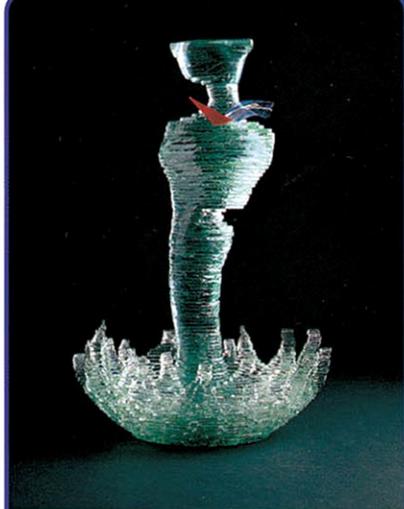
鯨はいよいよ二一世紀のクワイックフードだ。牛肉のハンバーガーがあり、乳製品チーズのピッツアがつつき、きょう海の幸の鯨があつた。鯨の話を聞くと、世界の人の選択だ。鯨の美徳ならいくらでも揚げよう。手ごろな一口サイズ、カラフルでグラフィックはじめにメニューをきまなくていい、いくつ食べても、いつやめてもいい。浮気な食欲の赴くままに海を散歩する、自由に鯨を旅すればいいのだ。旅といえは、かつて江戸前の魚以外「旅もの」と区別された。いまマクドローはシリール島、タコはアフリカ、ハマグリは韓国から。築地市場は世界の旅ものたちで賑わっている。

鯨は美しい、鯨は旨い、鯨は日本の文化、そして何より自由である。

さて、大会の方は、九回大会以来約二年振りにハンディ戦で行いました。優勝は、グロス九八、ネット七〇にて東喜代彦さん(S35年卒)が獲得されました。十二回大会の成績から大幅なスコア改善にはご本人が一番驚いておられました。男性のベスグロは、芦原直哉さんが七六というスコアで堂々獲得、女性のベスグロは、伊藤洋子さんが獲得されました。また、伊藤さんは初回より今回迄、連続出場という輝かしい記録を更新され皆勤賞を受賞されました。

次回は、来年の四月十八日(日曜日)に開催します。

場所は、藤吉会長より、「いくつあつたてみなさい。」との暖かいご指示をいただきましたので、これからはしばらく、候補のゴルフ場をあつてみます。できるだけ早い時期にコースを決めて皆様へご案内しますので、ご期待ください。



わが心のプリマベラ(ガラスObject)
ロシアで「世界文化都市推薦芸術大賞」受賞
渡辺百合世(S34年卒)

第十三回「木会ゴルフ報告」
十月十九日(日)
寺岡 隆宏
(S52年卒)

第十三回、二木会ゴルフは、千葉県の南総カントリークラブにて、藤吉会長以下二四名の参加の下、盛大に行われました。前日の雨模様からうって変わり、スコアの良し悪しを天候のせいには絶対にできない、雲ひとつない快晴、無風、半袖でも少し汗ばむ程の絶好のコンディションで九時にスタートしました。

秋の大会は、ここ三年間お世話になりました白風カントリークラブより、南総カントリークラブに変更して行なわれました。野原監査役の心遣いにより、南総カントリークラブを予約していただきました。

このコースは、株式会社熊谷組(鳥飼一俊社長、S40年卒)が設計、施工、運営を携つており、ラウンドフィー、賞品、その他の面で多大なるご協力をいただきました。書面を借りてここに厚くお礼申し上げます。

さて、大会の方は、九回大会以来約二年振りにハンディ戦で行いました。優勝は、グロス九八、ネット七〇にて東喜代彦さん(S35年卒)が獲得されました。十二回大会の成績から大幅なスコア改善にはご本人が一番驚いておられました。男性のベスグロは、芦原直哉さんが七六というスコアで堂々獲得、女性のベスグロは、伊藤洋子さんが獲得されました。また、伊藤さんは初回より今回迄、連続出場という輝かしい記録を更新され皆勤賞を受賞されました。

次回は、来年の四月十八日(日曜日)に開催します。

場所は、藤吉会長より、「いくつあつたてみなさい。」との暖かいご指示をいただきましたので、これからはしばらく、候補のゴルフ場をあつてみます。できるだけ早い時期にコースを決めて皆様へご案内しますので、ご期待ください。

次回は、来年の四月十八日(日曜日)に開催します。

場所は、藤吉会長より、「いくつあつたてみなさい。」との暖かいご指示をいただきましたので、これからはしばらく、候補のゴルフ場をあつてみます。できるだけ早い時期にコースを決めて皆様へご案内しますので、ご期待ください。